

宍道町埋蔵文化財調査報告 6

水 溜 古 墳 群

1988年3月

島根県宍道町教育委員会

序

水溜古墳群は、宍道湖南岸域における有数の大古墳群です。この古墳群はかつて開発か保存かをめぐって大いに論議された遺跡であります。関係各位の御努力、御協力により保存が決定されて今日に至っております。

さて、宍道町ではこの古墳群の一部 4.5 ha をとり入れて「古墳の森」と称する公園造りを進行中ですが、公園整備の必要上、群中最大規模の水溜 5 号墳、30 号墳の発掘調査を国・県の補助を受けて実施いたしました。調査の結果、水溜 5 号墳は 5 世紀後半の一辺約 2.5 m の方墳で、周囲に埴輪を廻らす二段築成の古墳であること、30 号墳は一辺約 1.4 m の方墳であるとの成果が得られましたのは、水溜古墳群の性格を知ることのみならず、宍道湖南岸域の古墳文化を解明するうえで新しい展望がひらけたものと確信しています。

本書が今後の文化財保護と研究の資料として御活用いただければ幸いに存じます。最後になりましたが、本調査にあたり終始御指導賜りました諸先生にお礼を申し上げるとともに発掘調査、遺物整理をお世話になった皆さん、また、御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和 63 年 3 月

宍道町教育委員会

教育長 福田 幸市

例　　言

1. 本書は宍道町総合公園拡張に先立ち、宍道町教育委員会が実施した水溜古墳群発掘調査の報告書である。
2. 調査にあたっては、国庫補助金、県費補助金を受けた。

3. 調査組織

調査指導　島根県教育庁文化課

島根大学名誉教授　山本　清

八雲中学教頭　蓮岡法暉

島根大学助教授　渡辺貞幸

調査担当者　宍道町教育委員会主事　稲田　信

事務局　宍道町教育委員会

教育次長　清原憲道

社会教育主事　五百川秀男

4. 本書中の矢印は、磁北を示す。
5. 本書の執筆、編集は事務局の協力を得て稲田がおこなった。
6. 遺物は宍道町教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

I 経 過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
A トレンチ	8
B トレンチ	8
C トレンチ	14
D トレンチ	14
E トレンチ	18
F トレンチ	18
G トレンチ	18
I トレンチ	21
J トレンチ	21
K トレンチ	23
L トレンチ	25
M トレンチ	25
N トレンチ	28
四 ま と め	30

挿 図 目 次

図1. 宍道町位置図	2	図版1. 水溜古墳群航空写真
図2. 水溜古墳群および周辺の遺跡	3	図版2. 水溜5号墳、30号墳全景
図3. 水溜古墳群配置図	4	図版3. Aトレンチ調査状況
図4. 水溜5号墳、30号墳トレンチ配置図	6	図版4. Aトレンチ出土遺物
図5. 水溜5号墳、30号墳墳丘実測図	7	図版5. Bトレンチ土層
図6. Aトレンチ出土遺物実測図	8	図版6. Bトレンチ遺物出土状況
図7. Aトレンチ土層図及び遺物出土状況図	9	図版7. Bトレンチ出土遺物
図8. Bトレンチ出土遺物実測図	10	図版8. Cトレンチ土層
図9. Bトレンチ土層図及び遺物出土状況図	11	図版9. Cトレンチ石列
図10. Cトレンチ出土遺物実測図	12	図版10. Cトレンチ出土遺物
図11. Cトレンチ土層図及び遺物出土状況図	13	図版11. Dトレンチ溝
図12. Dトレンチ土層図及び遺物出土状況図	15	図版12. Dトレンチ調査状況
図13. Dトレンチ出土遺物実測図	17	図版13. Dトレンチ出土遺物
図14. E、F、G、Iトレンチ土層図	19	図版14. Eトレンチ調査状況
図15. Jトレンチ出土遺物実測図	21	図版15. Fトレンチ調査状況
図16. Jトレンチ土層図及び遺物出土状況図	22	図版16. Gトレンチ調査状況
図17. Kトレンチ出土遺物実測図	23	図版17. Iトレンチ調査状況
図18. Kトレンチ土層図及び遺物出土状況図	24	図版18. Jトレンチ調査状況
図19. Lトレンチ出土遺物実測図	26	図版19. Jトレンチ遺物出土状況
図20. Lトレンチ土層図及び遺物出土状況図	27	図版20. Jトレンチ出土遺物
図21. Mトレンチ出土遺物実測図	28	図版21. Kトレンチ調査状況
図22. Nトレンチ土層図及び遺物出土状況図	29	図版22. Kトレンチ遺物出土状況
		図版23. Kトレンチ出土遺物
		図版24. Lトレンチ遺物出土状況
		図版25. Lトレンチ出土遺物
		図版26. Mトレンチ土層
		図版27. Mトレンチ出土遺物
		図版28. Nトレンチ土層
		図版29. Nトレンチ遺物出土状況
		図版30. Nトレンチ出土遺物

図 版 目 次

I 調査の経過

1. 調査にいたるいきさつ

昭和59年3月、全国牛能力共進会（昭和62年開催）の主会場を考えた中央家畜市場の建設の話がもちあがり、予定地の分布調査の依頼が町教委になされた。町教委では県文化課の協力を得て、分布調査を行ったが、その時、今回の調査対象となった水溜古墳群が発見され、その規模の大さきにより、事業地の変更を願った。事業地は協議の末、現在の中央家畜市場に落ち着き、昭和59年度町教委の行った清水谷、矢頭遺跡の調査へとなるのだが、残された水溜古墳群の取り扱いが問題となり、大いに論議を呼んだ。

昭和60年度のことであるが、たまたま水溜古墳群が国道総合公園に隣接し、国道54号線、広域農道にも近いことから、古墳を中心とした公園をつくろうではないかという気運が高まり、町建設課を中心に計画が具体的に進められていった。この計画では、古墳群中最大の水溜5号墳（発見時は全長6.3mの前方後方墳とされていた）を中心とする古墳の広場、キャンプ施設をもつ古代生活体験の広場、町内外の古墳の模型からなる歴史の広場の3ゾーンを構成するもので、公園のメインとなる水溜5号墳の具体的資料が、公園の運営上、教育上必要であるとされた。町教委では、町建設課、町当局の協議を受け、昭和62年度中に国庫補助金、県費補助金を受けて調査を行うことに決定した。

古墳は公園の一部として将来まで残るものであり、不必要的掘り起こしは避るべきであるが、資料上、古墳の墳形、規模、築造年代を明確にしたかったので、必要箇所に幅1m、長さ10mのトレンチを約10本設定し、調査していくことにした。

2. 調査の経過

調査は、測量、トレンチ調査を含めて約6ヶ月を予定した。まず、測量のために10m間隔の杭を設置し、5月11日より測量調査を行った。測量図は縮尺1/100のものを作成するもので、6月4日に終了した。トレンチは設定順にA・B・C・・・とし、6月15日からAトレンチの調査にとりかかった。その後、梅雨の時期、夏の委員会業務による休止の時期を挟んで調査は10月14日まで続けていった。最終的にはAトレンチから始めて、IIトレンチを除きNトレンチまでの13トレンチの調査を行ったことになる。その後、遺物洗い、トレンチの埋め戻し等を行い、1月になってから本格的な遺物整理を行った。遺物整理は、埴輪がほとんどであったので、これの実測、拓本が中心となった。

II 位置と歴史的環境

水溜古墳群は約30基からなる宍道町最大の古墳群である。宍道町大字白石3254-2番地に所在するもので、宍道湖岸より南に約1.5km入り、南には宍道湖南部広域農道が、東には宍道総合公園が、北には島根中央家畜市場が隣接する。本遺跡の北（現在の中央家畜市場）からは、3基の墳墓からなる清水谷遺跡と弥生時代～古墳時代の住居址や横穴墓からなる矢頭遺跡が発見されており、密接な関連を窺わせる。古墳群は約1.4haにわたって分布しており、標高は低いもので約50m、高いものは約70mの範囲にある。現在、古墳群は山林の中に分布するもので、周囲にこれといった水田面、畠地はないが、地元の話では、かつて、交通の要所であったらしく、群中を大小の道がはしっているのを確認できる。

さて、宍道町で現在までに確認されている最古の遺跡は縄文時代に遡る。大字東来待の弘長寺遺跡^{注2}、庄³三成遺跡、大字白石の伊野谷遺跡がそれであり、いずれも縄文後期一晩期にかけての土器が出土しており、特に弘長寺遺跡からは同時に石斧も確認されている。なお、先に平野部の踏査を行った時点では縄文時代に関する遺物の発見は他になく、宍道町における縄文文化の脆弱さを感じさせられる。弥生時代になると先の三成遺跡、大字佐々布の平田遺跡、佐々布A・B遺跡、など数例が確認されており、縄文遺跡に比べるとやや広がりをみせてくる。宍道の場合、大きな平野部は見られず、小さな谷水田ごとの開発が徐々に進められていったのだろう。

古墳時代にはいると、遺跡数、遺物量は爆発的に増加する。現在までに約100近くの古墳、横穴が確認されており、今後の調査によって益々増加する傾向にあろう。分布図を見ると、古墳時代の遺跡は町全域にまんべんなく分布しており、宍道湖岸域を中心に多数の古墳が点在する。また、来待川、鏡川、同道川、佐々布川の形成する地区ではその区域を単位とすると考えられる古墳が存在する。

律令時代になると『出雲國風土記』その様相を知り得るようになる。特に宍道に関する記載の部分には、宍道の地名伝承や、当時の人々の精神文化を知り得る「犬石、猪石」の記述があるが、現在も風土記の記述どおりの石が存在する。また、現在の宍道町が健部郷、拌志郷の一部と宍道郷より成ることや、大字佐々布字佐々布下付近には宍道駅^{注5}が置かれていたことが知られており、当時の社会構造の一部を垣間見ることができよう。



図1. 宍道町位置図



図2. 水溜古墳群および周辺の遺跡

- 1.水溜古墳群
- 2.消水谷遺跡
- 3.矢頭遺跡
- 4.才横穴群
- 5.O M横穴
- 6.觀音寺横穴
- 7.穴道要害山
- 8.隨音寺横穴群
- 9.伝塙治判官の墓
- 10.荻古墳
- 11.伊賀見古墳群
- 12.犬石、猪石
- 13.下の空古墳
- 14.椎山1号墳
- 15.女ヶ峰横穴
- 16.金山要害山
- 17.大森経塚
- 18.岡の目遺跡
- 19.佐々布要害山

III 調査の概要

1. 水溜古墳群について

水溜古墳群は昭和59年3月に実施した分布調査により発見された古墳群で、現在のところ30基から構成されている。「水溜」の名称は旧小字によって名付けたものであるが、地元の人の話では水溜5号墳の北側にくぼ地があり、雨などが降ると水が溜まるので、水溜の名が付いたという。

古墳群は約1.4haの範囲に分布するが、隣接する現島根中央家畜市場ではその造成の際3基の墳墓からなる清水谷遺跡、弥生～古墳時代の住居址、横穴墓からなる矢頭遺跡が発見されている。また古墳群を北向きに才川の形成する谷平野を下ると、谷の中間にⅡ群16穴からなる才横穴群が、谷の入口付近には隨音寺横穴群に代表されるような岩に掘り込んだ横穴墓が数例確認されている。^{注5}

水溜古墳は、下図のような分布を示し、13個の円墳、16個の方墳、1個の前方後円墳からなり、群中最大規模をもつ5号墳を中心いて分布している。5号墳の他は1辺や直径が10m前後の小規模な古墳が多い。分布状況をみると、地形に制約されているため、尾根上に並ぶように築造されている。水溜5号墳、清水谷、矢頭遺跡の発掘例をみてみると、弥生時代から古墳時代後期にかけての墳墓が確認されており、それらが連綿と造り続けられた可能性がある。



図3. 水溜古墳群配置図

水溜古墳一覧表

名 称	墳 形	規 模(m)	備 考	名 称	墳 形	規 模(m)	備 考
1号墳	方 墳	10.5 × 7.5 高 0.4 ~ 0.7	切削溝	16号墳	円 墳?	12.8 × 11.3 高 0.6	切削溝
2号墳	方 墳?	8.5 × 8.5 高 0.4 ~ 0.7		17号墳	円 墳	9.8 × 9.2 高 0.3 ~ 0.8	切削溝
3号墳	方 墳?	9.5 × 6.5 高 0.4 ~ 0.9		18号墳	"	径 6.6 高 0.1 ~ 0.4	
4号墳	円 墳?	7.5 × 7.5 高 0.4 ~ 0.6		19号墳	"	7.3 × 9.0 高 0.1 ~ 0.9	切削溝
5号墳	方 墳	2.5 × 2.5 高 3.5	埴輪出土	20号墳	"	6.1 × 5.9 高 0.3 ~ 0.8	"
6号墳	円 墳	8.0 × 7.0 高 0.7 ~ 0.9	周 溝	21号墳	"	5.2 × 6.5 高 1.2	急斜面に立地 切削溝
7号墳	円 墳?	径 約 8.0 高 約 0.5		22号墳	前 方 後 円 墳	全長 24.5 後円高 15 前方高 0.5	切削溝
8号墳	方 墳	12.7 × 11.0 高 約 1.3		23号墳	方 墳	6.6 × 6.4 高 0.2 ~ 0.7	
9号墳	"	10.6 × 7.5 高 0.5 ~ 0.8	切削溝	24号墳	"	8.6 × 5.8 高 0.6	
10号墳	"	7.3 × 7.0 高 0.4 ~ 0.3	"	25号墳	"	一辺 約 6.0 高 約 0.6	
11号墳	"	11.3 × 9.2 高 0.5 ~ 1.0	"	26号墳	円 墳	11.4 × 11.7 高 0.7 ~ 1.0	南西に前方部 状のテラス
12号墳	"	8.5 × 9.5 高 0.5 ~ 0.8	"	27号墳	"	10.5 × 8.2 高 1.0 × 0.6	
13号墳	"	12.0 × 11.0 高 0.4 ~ 1.2	"	28号墳	"	8.5 × 5.8 高 0.3 ~ 1.2	
14号墳	円 墳	11.5 × 11.4 高 1.0 ~ 1.2	南側に前方部 状のテラス	29号墳	方 墳	9.0 × 8.0 高 0.4 ~ 0.8	
15号墳	方 墳	11.6 × 12.0 高 0.6	切削溝、テラス	30号墳	"	1.4 × 1.2 高 2	

2. 水溜5号墳、30号墳の概要

調査前、不明確ながらも、水溜5号墳は全長6.3mの前方後方墳の可能性を秘めるとの判断の下、準備を進めていった。その根拠として墳丘実測図、実物を見てみると、不整形ながらも、前方後方形になっていたからである。しかし、細部をみてみると、前方部側と後方部側の比高差があり過ぎるなど疑問の点も多く、確かなことは発掘調査を待たねばならなかった。

調査はAトレンチより進めていったのだが調査を進めるうちに後方部と考えた墳丘より埴輪片が多量に出土し始めた。この状況をみると、後方部の裾部は、前方部の墳頂より高い位置にあることが確認された。またDトレンチを調査すると、前方部とのくびれ部付近（杭E-6とE-5の間あたり）より墳丘を区切るような溝が確認された。そして後方部側を調査するにつれ、前方部と主軸がずれていることが確認された。これらのことから水溜5号墳は2つの方墳からなる連なった古墳の可能性が強いと判断した。そこで、調査の終了後、後方部と考えていた大きい方墳を5号墳、前方部と考えていた小さい方墳を30号墳とした。

3. 調査の方法

水溜5号墳、30号墳上に10m間隔の杭を委託設置し、それを基準に墳丘測量を行った。杭はほぼ南北にA-Gの7列、東西に1~11の11列による方眼をつくり、各杭にA-2、B-4などの名称をつけたもので、今回の調査の基準は全てこれらの杭によった。座標軸をみると、E-8はX=-67,534m、Y=+68,097m、標高69.8m、E-1はX=-67,586m、Y=+68,046m、標高65.3mである。

トレンチの設定もこの杭によった。AトレンチはE軸に沿ってE-9を中心にして23.5m、Bトレンチは8軸に沿ってD-8を中心にして16m、Cトレンチは8軸に沿ってF-8を中心にして11.5m、DトレンチはE軸に沿ってE-6を中心にして22m、EトレンチはE軸に沿って12m、Fトレンチは4軸に沿って10m、Gトレンチは4軸に沿ってF-4を中心にして10m、Iトレンチは5軸に沿って5.5m、Jトレンチは6軸に沿って8m、KトレンチはD軸、E軸の間8m、Lトレンチは7軸に沿ってF-7を中心にして10m、Mトレンチは7軸に沿ってD-7を中心にして10m、NトレンチはE軸とF軸の間9mである。

調査は、古墳の墳形、規模、築造時期を目的とするものであるので、墳端を明確にできるように設定した。AトレンチからB・C・D・・・と進めていくもので、遺物の出土状況と土層の実測が主な調査内容となった。

この古墳の発見時は、5号墳と30号墳が1つの前方後方墳と考えていたため、調査終了時から考えるとやや傾いた軸の設定になっていたようである。

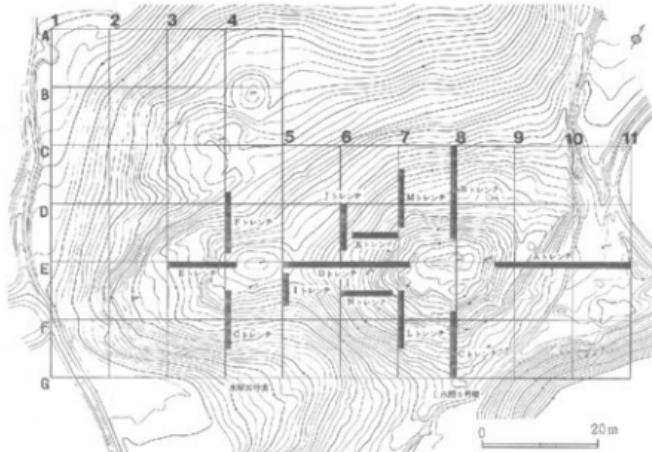


図4. 水溜5号墳、30号墳トレンチ配置図

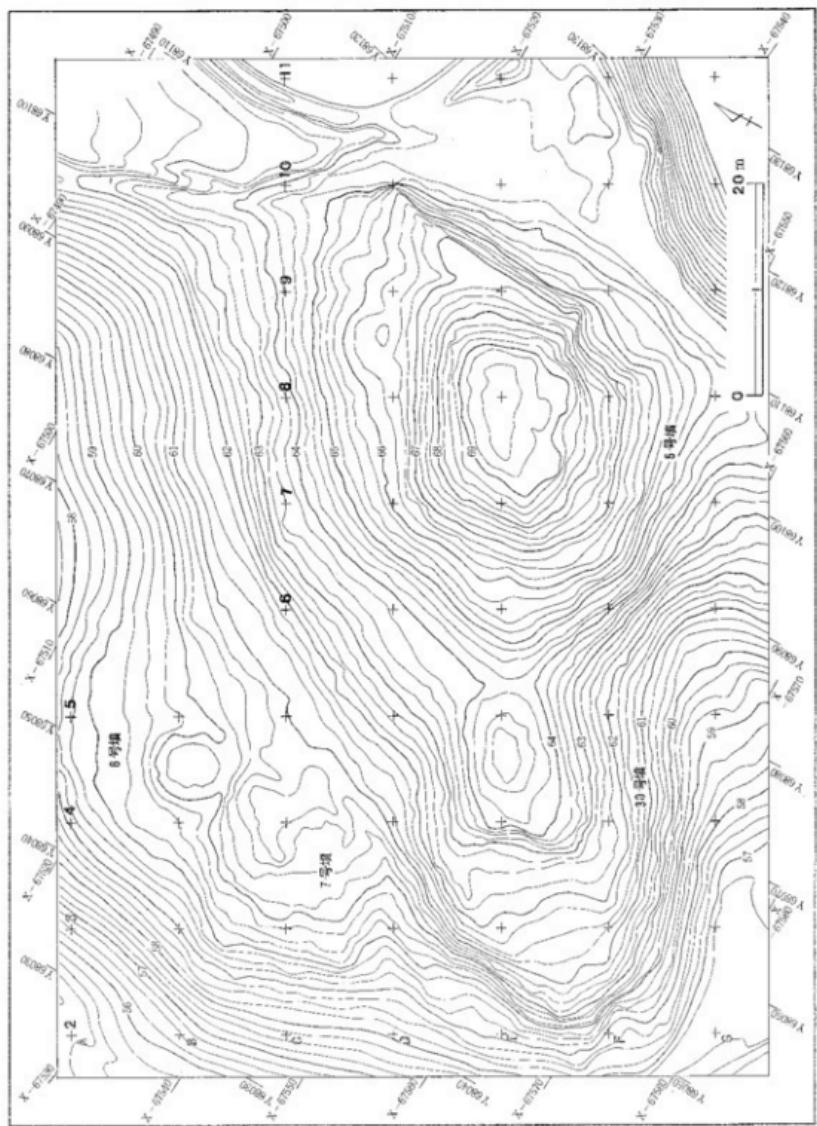


图 5. 水稻 5 号塘、30 号塘填丘实测图 (1 / 500)

(1) A トレンチ

Aトレンチは5号墳東端、E軸に沿った幅1m、長さ23.5mである。E-9より東へ1.5mのところから大きく削平され、約2.5m下った地点で広い平坦面を形成している。この削平部分は後世のものと考えられ、地山からの堆積は薄く、遺物は全く出土していない。E-9より西へ3.5mと東へ1.5mは比較的古墳築造時の姿を示していると考えられる。E-9より西へ2.0m～2.5mのところに幅50cmの平坦面がみられるが、これは5号墳の他のトレンチでも観察されたように、二段築成の段と考えられ、Aトレンチの部分では地山を加工して墳丘面を形成したことが窺える。E-9より東、削平部までの間は平坦面であるが、幅約0.7m、深さ0.2mの溝がみられる。土層を観察すると、墳丘加工面上に堆積した土層を掘り込んでおり、これも後世の溝、あるいは道として利用されたものと推定される。墳塁は、この溝のためにはっきりしないが、E-9の付近であろう。

遺物として埴輪片が約50片出土しており、いずれも5cm前後の小さなものである。E-9を中心とする幅1.6mに分布するが、特に溝の中から多く出土している。土層の関係からみると、黄褐色土層、灰茶色土層からの出土が多い。

出土した埴輪は、いずれも破片であり、全容を知り得ないが、すべて土師質で黒斑を有さない。
注6
外面には2次調整をおこない、施し方は明確ではないがB種あるいはC種横ハケと考えられる。図6-5は底部調整をもつが、内面に指をあて、外面には、板状の工具をあてて押圧した痕跡が観察できる。

(2) B トレンチ

Bトレンチは5号墳の北端、8軸に沿った幅1m、長さ16mである。調査全体を通して判明したことであるが、5号墳北側斜面はきれいな等高線を示すものの、現在見られる裾部は古墳本來の裾部よりやや内側に入っている。このことは、5号墳北側斜面は自然の崩落があったか、後世の削

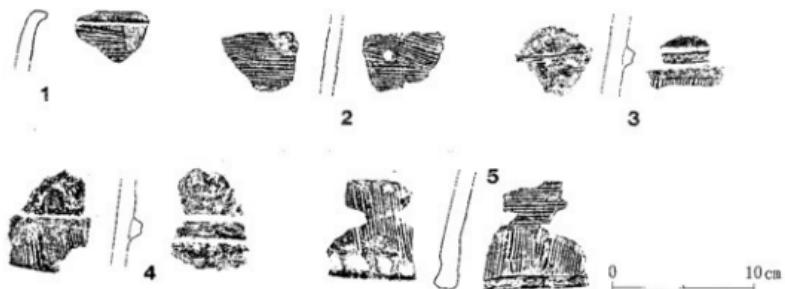


図6. Aトレンチ出土遺物実測図



図 7. A トレンチ土層図及び遺物出土状況図

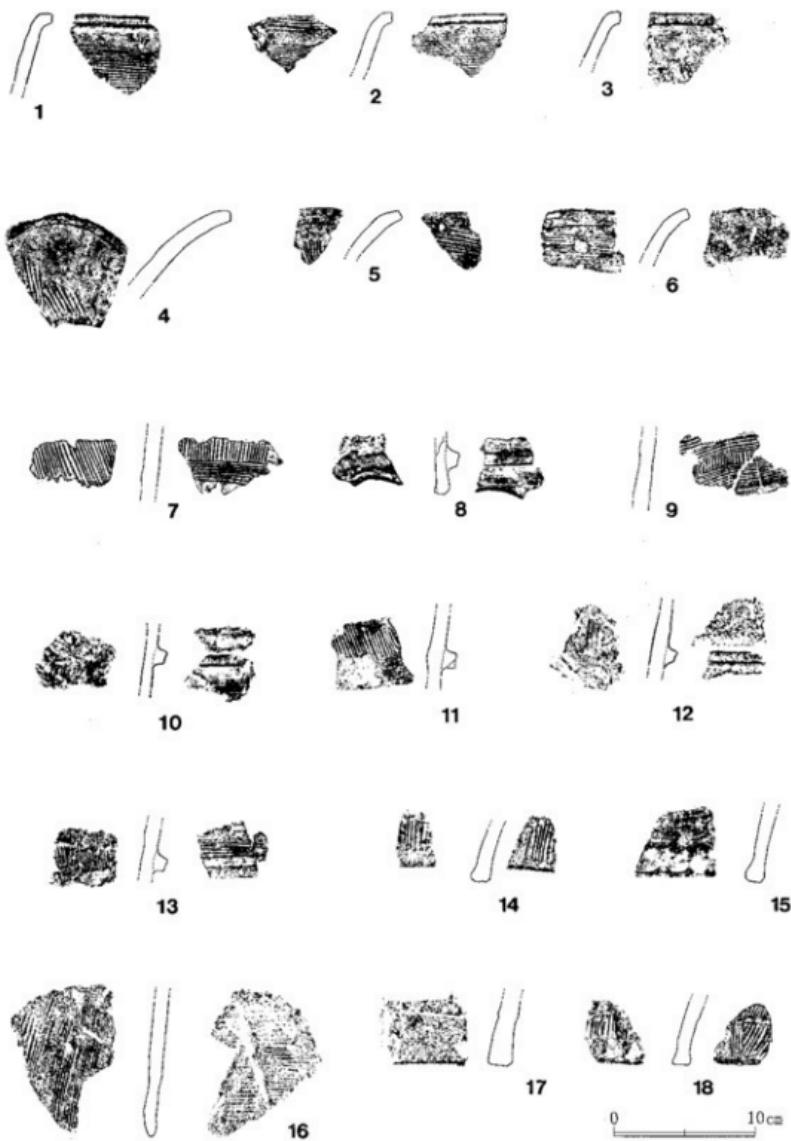


図 8. B トレンチ出土遺物実測図

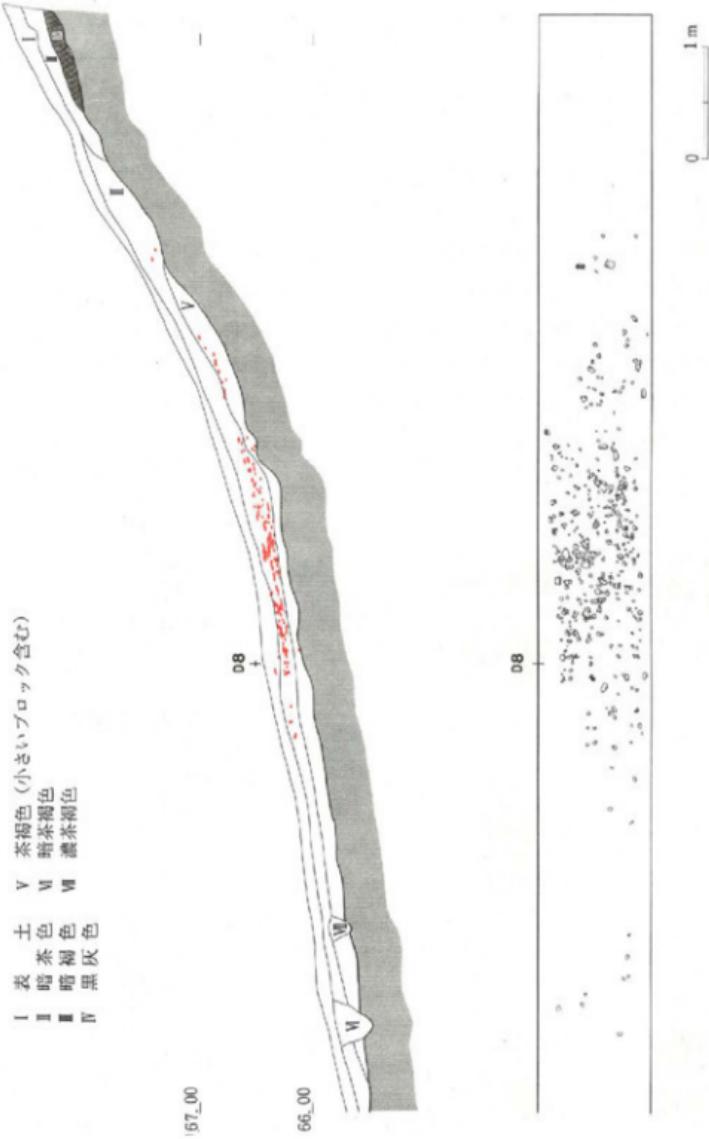


図 9. B トレンチ土層図及び遺物出土状況図

平を受けたと考えられるが、地形からみると、人工的な削平を受けたような気がする。また、埴輪の出土状況をみると、他のトレンチに比べ、細かい破片が広範囲に、しかも浅い地点から出土しており、後世、何らかの手が加ったと考えたほうが妥当であろう。

土層を観察すると、D-8から南へ1.6mの地点が地山を加工した墳裾と考えられ、あまり明瞭ではないがD-8より南へ3.9mの地点あたりが二段築成の段と考えられる。標高は墳裾が66.3m段築部が約67.3mあたりといえよう。また段築部付近より頂部にかけては旧表土の上に暗褐色の盛土が観察されるが、段築部より裾部にかけてはD-8より北4.1mまで旧表土が確認できないので、古墳上段部は盛土により、下段部は地山を削り出したものであろう。

ここでも出土遺物は埴輪のみである。平面的な分布をみると、D-8の地点からD-8より南へ2.5mの地点に多く分布するが、その破片は他のトレンチのものと比べると細かいものが多い。土層的にみると、暗茶色土層に特に多く含まれる。

出土した埴輪はすべて土師質で、黒斑を有さない。器形は円筒埴輪が主であろうが、図8-4、5でみられるように朝顔形埴輪も若干含まれている。外面には2次調整を施すが、図8-9の場合、



図10. Cトレンチ出土遺物実測図

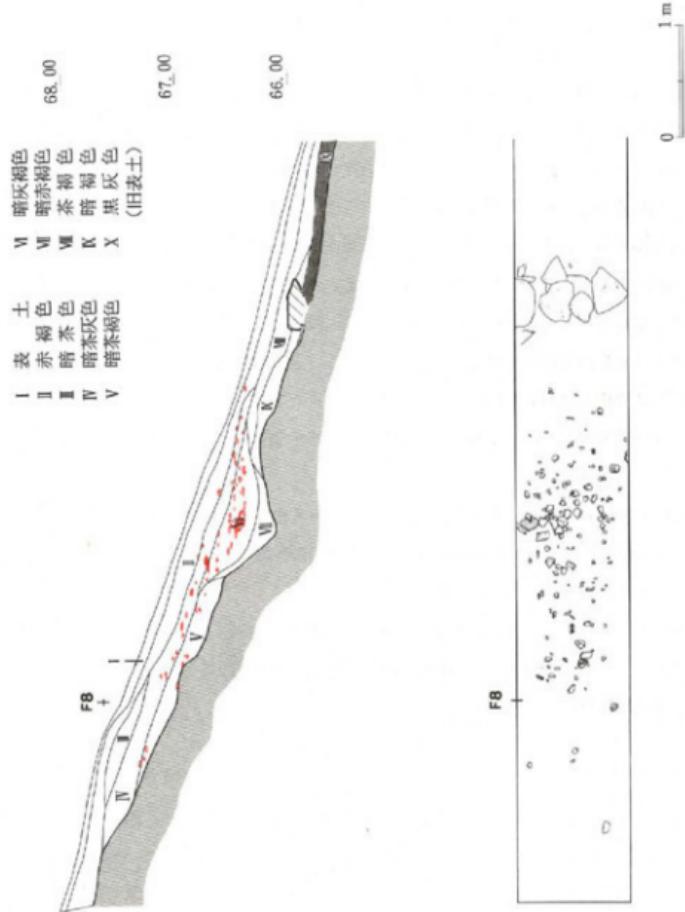


図11. Cトレンチ土層図及び遺物出土状況図

明らかにB種横ハケを施している。基底部は5片確認されたが、図6-14、15、17、18については底部調整らしきものが確認できるが、16についてはそれが認められない。

(3) Cトレーンチ

Cトレーンチは5号墳の南端、8軸に沿ってF-8を中心とする幅1m、長さ11.5mである。地形測量図を見てみるとCトレーンチ東側に大きく削平された部分があつたりして、遺構の保存状態はあまり良くないと想定していたが、調査してみると比較的旧地形を良く残しており、出土した埴輪片も大型で、原位置からそれほど移動していないようにみうけられた。

土層図を観察すると、F-8より南へ1.5mの地点で地山がやや深く掘り込まれており、さらに南へ平担面がやや続く。原形をよく留めた埴輪片もF-8の南1.5m地点から多く出土しており、こここの地点が墳裾であろう。標高は約66.2mである。段築部はこのトレーンチでは確認されていない。

F-8の南3.5mに石列がみられるが、土層図をみると古墳築造に伴って設置されたと考えた方がよいが、石列より南では旧表土が観察され、地山の削平がなかったようである。石列の性格は不明で、ボーリング棒で周辺を探ってみたが、長く続くものではなく、Cトレーンチを中心に約2m伸びる程度である。

出土遺物は埴輪のみである。平面分布をみると、F-8地点から、南へ2.5mの範囲に多く分布しており、土層的にみると、原形を留めた比較的大きい破片は暗灰褐色土層に多く、比較的小さい角の丸まったくの破片は上層の暗茶灰色土層から出土している。

埴輪はいずれも土師質で黒斑を有さない。外面調整は継ハケの後、2次調整の横ハケを施す。この横ハケは図10-5でB種横ハケが確認されているが、他のものについては不明である。このトレーンチから基底部は発見されていない。

(4) Dトレーンチ

Dトレーンチは5号墳と30号墳をつなぎ、E軸に沿ってE-6を中心とする幅1m、長さ2.2mである。調査前は、5号墳、30号墳を一つの前方後方墳とする考え方も強く、今回の調査のポイントとなるトレーンチであった。

土層図を観察すると、E-7より西へ約4.2mの地点に地山加工の変換点があり、この付近から埴輪の出土が多いことからも、5号墳西端の墳裾と考えられる。墳裾の標高は約66.3mである。一方、F-7より西へ2.5mの地点と、同じく西へ1.5mの地点に幅約80cmの平担面がみられ、いずれかが、二段築成時の段築部分であろうが、Bトレーンチの例からみるとレベル的には上段の平担部がそれに近い。標高67.3mである。また5号墳の西側（Dトレーンチ側）も北側（Bトレーンチ側）と同様

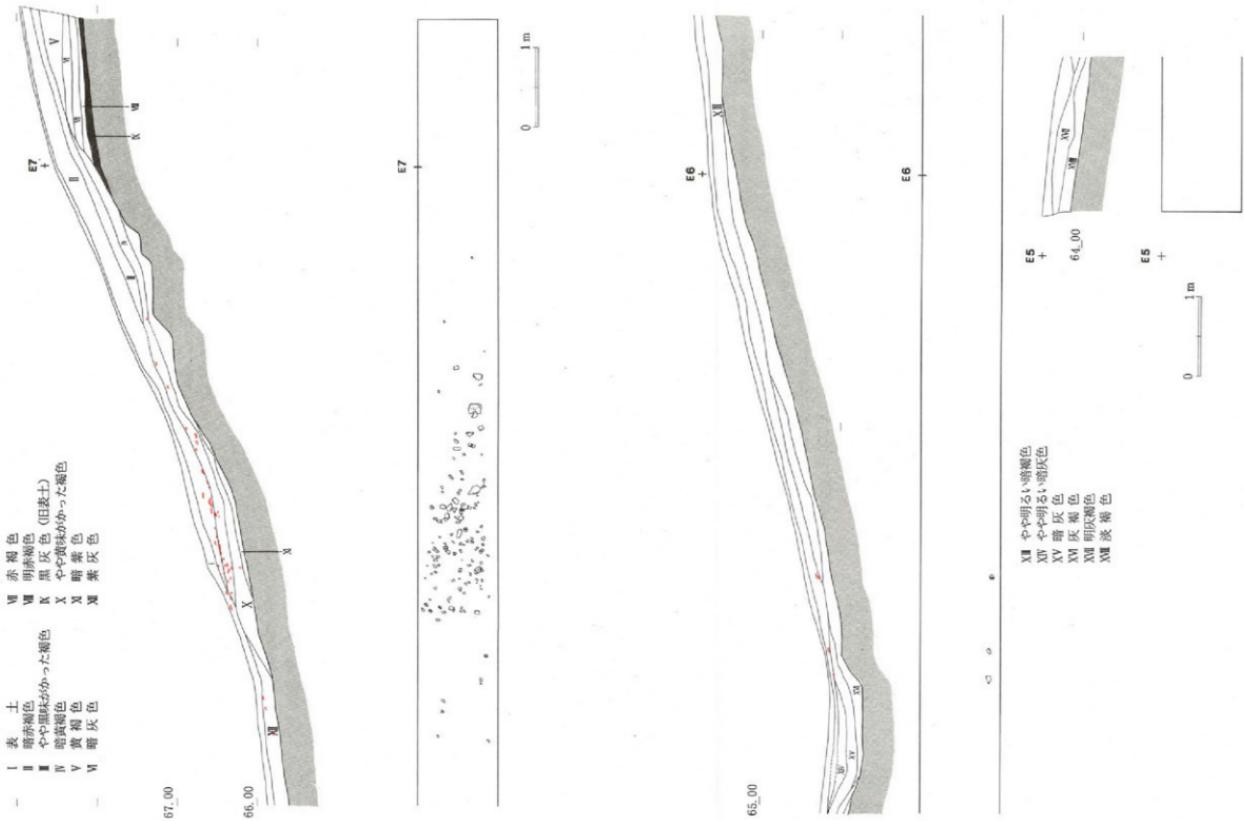


図12. Dトレント土崩図及び遺物出土状況図

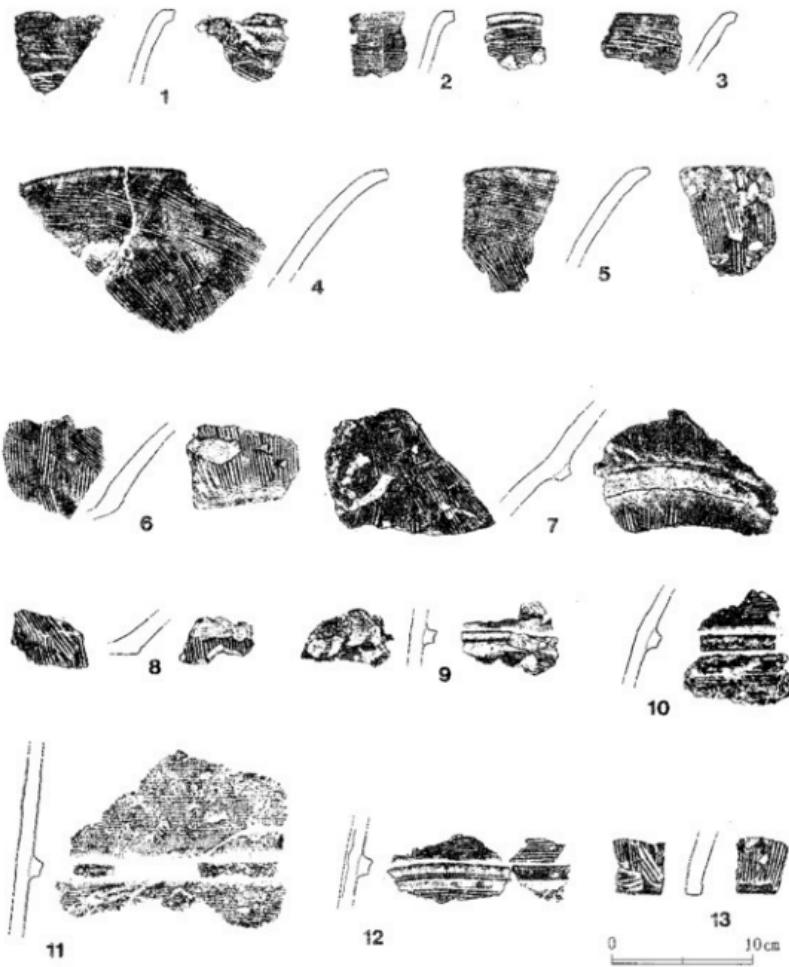


図13. Dトレンチ出土遺物実測図

に、段築部分より頂部にかけては盛土による成形であり、段築部分より下方は地山を加工して墳形を整えたことが確認できる。

ところで調査のポイントとなった「2つの古墳か1つの古墳か」の問題であるが、E-5より東約3mの地点に幅2.5m、深さ約0.5mの溝が検出された。この溝は、土層図より見ると、30号墳築

造時に掘り込まれたようである。

出土遺物は埴輪が検出され、E-7より西3mの地点から同じく西6mの地点に多く、5号墳の墳裾周辺から多く分布している。30号墳側からは、前述の溝から破片が少々出土しているが、いずれも5号墳側からの流れ込みと考えられ、30号墳には埴輪を使用していないようである。土層的にみてみると、特に暗茶褐色土層に多く含まれ、わずかに、その上層、下層にも含まれている。

埴輪はいずれも土師質で黒斑を有さない。器形をみると、円筒埴輪と朝顔埴輪があるようである。胴部の外面調整はいずれも二次調整を行っており、明瞭ではないが、B種の横ハケであろうか。図B-13は基底部であるが、外面には底部の5mm上まで縦ハケを施す。内面にもはっきりした加工痕を残すが、手法は判らない。

(5) E トレンチ

Eトレンチは30号墳の西端で、幅1m、長さ12mのトレンチである。E-4の地点から西に向かい急斜面になり、E-4より2m地点まで下っていくが、その差約1.5mである。調査前は、E-4の付近が30号墳の端部の上場で、下った地点が下場と考えていたが、ここも後世の加工を受けたようである。

土層図をみると、墳丘上では、地山と表土の間に一層ほどあり、盛土ではないかとも考えられる。いずれにしろ、このトレンチ部分は大きく削平されているよう古墳の裾部などははっきりしていない。遺物は確認されていない。

(6) F トレンチ

Fトレンチは30号墳の北側で、4軸に沿った10mである。このトレンチは、前方部の開き具合を調べるために設定したものであって、30号墳の調査のためにはやや不適切であったようにおもえる。

土層図を観察するとE-4より4m北の地点から旧表土がみられることから、墳頂部は地山を削り込んだものと考えられるが、この土層をみると、古墳の盛土状況や墳端については確認できないようである。

遺物は確認されていない。

(7) G トレンチ

Gトレンチは30号墳の南側で4軸に沿った幅1m、長さ10mである。このトレンチの付近には測量図にも明らかなように、F-4からF-5の地点にかけてやや平坦面がある。この平坦面を南に過ぎると大きく傾斜して約5~6m下る。

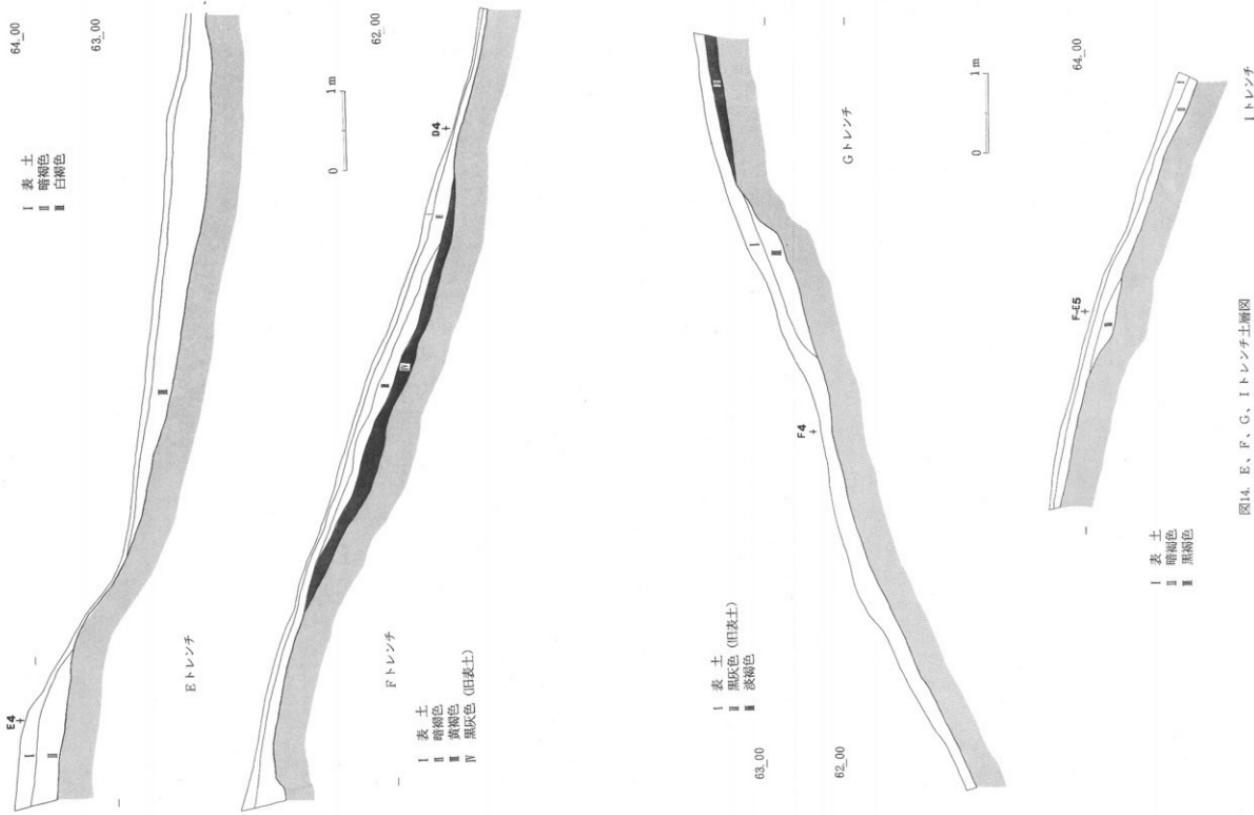


図14. E、F、G、I レンチ土壌図

土層図をみると、F-4より2.5m北の地点に裾部らしい深い地山加工がみられる。一方、この裾部からやや墳頂部にのぼった地点では旧表土が観察できる。このことから、30号墳の南側斜面の場合、墳裾の部分は地山を加工して整え、墳頂の部分では地表面がそのまま利用されたか、盛土を施したことが推定されるが、今回調査した部分まででは、いずれの方法によったかは判断できないようである。

遺物は全く出土していない。

(8) I レンチ

I レンチは30号墳の南側、5軸に沿った幅1m、長さ5.5mである。このレンチもF レンチ、G レンチと同様に前方後方墳を意識したものであったため、30号墳のための調査としてはやや不適切なレンチ設定であったようにおもわれる。

土層図を観察すると複雑な堆積は示しておらず、古墳の端部であるためもあるが明瞭な墳丘形成のための加工痕はみられない。ただ、F-5より南へ4.5mの地点を中心に、やや地山を掘り込んだとおもえる部分があるが、これが墳端にあたるものか、あるいは、D レンチで検出された溝に続くものであるのか、はっきりしない。

遺物は出土していない。

(9) J レンチ

J レンチは、5号墳と30号墳との間に設定したもので、6軸に沿って幅1m、長さ6mである。このレンチは、古墳周辺の状況を探るために、調査に先立ち、D-6の付近で埴輪片が数片表探されていたため、何らかの墳構があるかもしれないということで設定したものである。地形はなだらかな傾斜面である。

土層図を観察すると、F-6より北へ4mの地点から、同じく北へ9mの地点までの、レンチほぼ全域に明瞭に旧表土がみられ、地山を加工した痕跡はない。D レンチのE-6付近では旧表土は観察されていないことから推察すると、D レンチ側は地山を削り、J レンチ側はやや低かったので、土を盛ったものと考えられる。

遺物として埴輪片がレンチのほぼ全域から約20片ばかり出土しており、特に集中する地点は

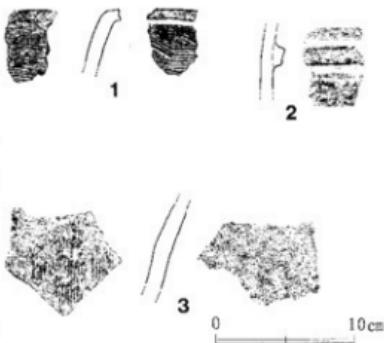


図15. J レンチ出土遺物実測図

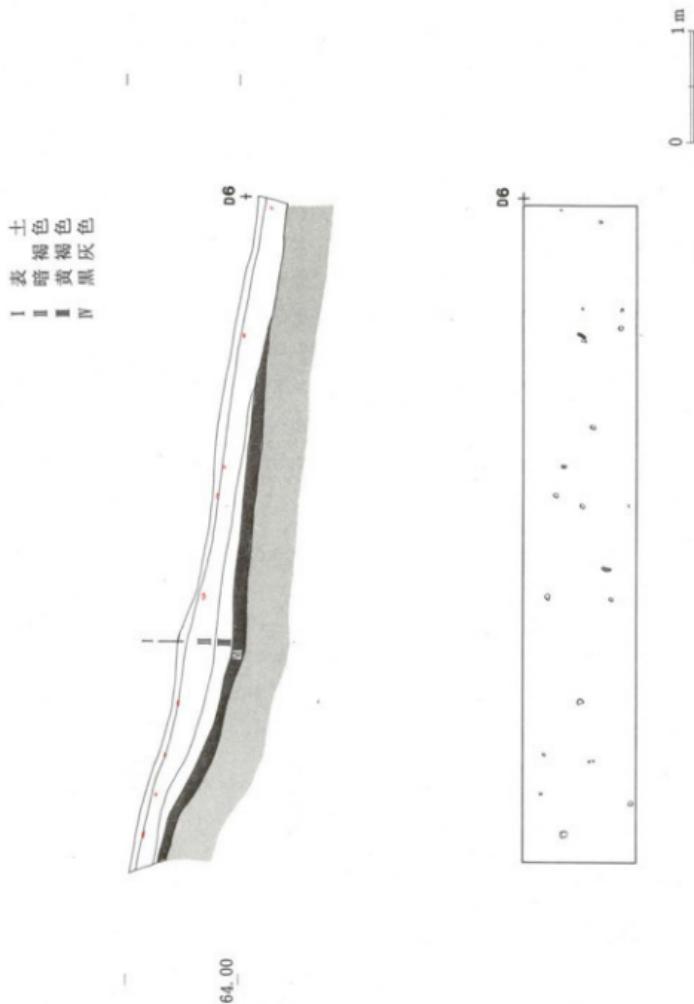


図16. Jトレンチ土層図及び遺物出土状況図

ない。土層の関係からみると、いずれも表土あるいは暗褐色土中より出土しており、古墳築造後の流れ込みによると考えたがよい。

埴輪は流れ込みによるためであろうが、小さな破片が多く、詳細はわからないが、いずれも土師質で黒堀は有さない。外面調整を観察できるものをとりあげてみると、胴部には二次調整の横ハケを施しているが手法は不明である。

⑩ K トレンチ

Kトレンチは5号墳の西側、D軸とE軸の中間に平行しており、幅1m、長さ8.5mである。このトレンチは5号墳が1つの方墳であろうと確認してから設定したもので、古墳の墳形、墳裾部の位置をより明確にしようとするものであった。調査の結果からであるが、KトレンチやNトレンチを設定した西側斜面は他の斜面に比べて比較的古墳築造時の地形を残しているようである。

土壇図を観察するとD-7とE-7の中間点から約2.5m西の地点に地山を大きく削る変換点があるが、他のトレンチの状況や、埴輪の出土状況より、墳裾部であろうと考えられる。標高は66.3mである。この墳裾からやや墳頂部に向かうと旧表土がみられ、その上に盛土らしき土層が確認できる。一方、墳裾から約4m西にかけては地山を削って、古墳の周囲を整えているようである。

遺物は埴輪片が出土しており、墳裾部を中心に西へ流れるようにして約2mの範囲に分布してい

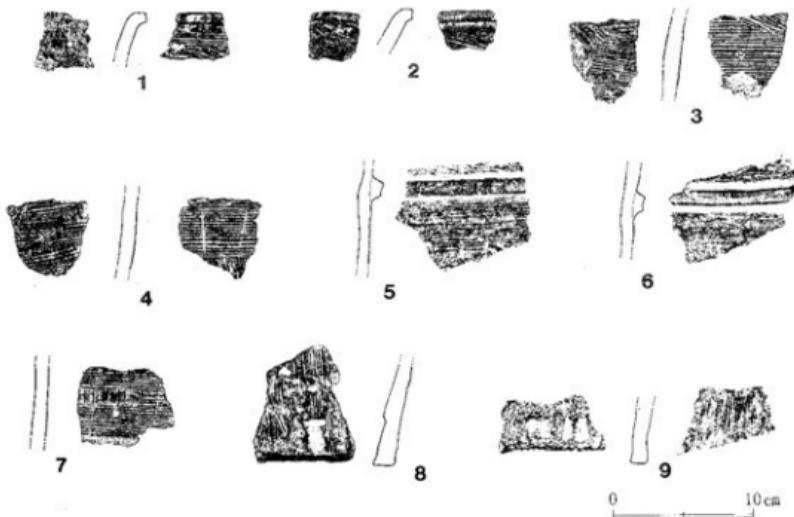


図17. Kトレンチ出土遺物実測図



図18. Kトレンチ土層図及び遺物出土状況図

る。土層的にみてみると、黒褐色土層、暗褐色土層が多く、表土にも含まれている。

埴輪は約70片出土しているが、いずれも土師質で、黒斑を有さない。器形は円筒埴輪の口縁が確認されている。胴部の外部調整はいずれも2次調整を施しており、図17-4、7では明らかにB種横ハケが確認されている。基底部は2片ほど確認されているが、いずれも底部調整はなされていないようである。

⑪ Lトレント

Lトレントは5号墳の南側、7軸に沿ってF-7を中心とする幅1m、長さ10mである。方墳の南の部分に設定したトレントであるため、墳裾のほうは比較的良く残っていたが、墳頂部に近づくにつれ、墳丘面が流出していた。

土層図を観察すると、F-7から南へ0.5~1mあたりで地山を削って整えているが、このあたりが墳裾であろう。標高は66.2mあたりである。墳裾部分から2m少々墳頂部に向かうともう一段地山を削った変換点があるが、これが二段築成の段築部であろうか。

遺物は埴輪片が出土しており、平面的にはF-7よりやや南を中心に幅2mの範囲に分布しており、その前後では全く確認されていない。土層的にみると、黒褐色の土層中にはとんどの破片が含まれている。

埴輪は約100片出土しており、いずれも土師質で黒斑を有さない。比較的大型のものも含まれており、5号墳の西側から南側にかけてはあまり後世の加工を受けていないようである。器形は円筒埴輪の口縁が確認されている。胴部の外面調整は縦ハケの1次調整の後、横ハケの2次調整をおこなっており、B種の横ハケがみられる。基底部も数片確認されているが、図19-12は底部調整は認められず、11は、内面に指頭圧による調整痕を残す。

⑫ Mトレント

Mトレントは5号墳の北側、7軸に沿ってD-7を中心とする幅1m、長さ9mである。このトレントは古墳のちょうど北側斜面と西側斜面のコーナーに位置し、また、Bトレントでも述べたように、後世の削平を受けていると考えられる部分である。土層図を観察するとD-7あたりで地山の変換点があるので、この付近が墳裾であろう。

遺物は埴輪片が約60片出土しているがいずれも土師質で、黒斑を有さない。器形は円筒埴輪の口縁が含まれており、外面調整として、胴部には縦ハケの1次調整の後、横ハケの2次調整を施している。横ハケについてはここでも確認できるものについて全てB種横ハケである。基底部も出土しているが、底部調整はないようである。

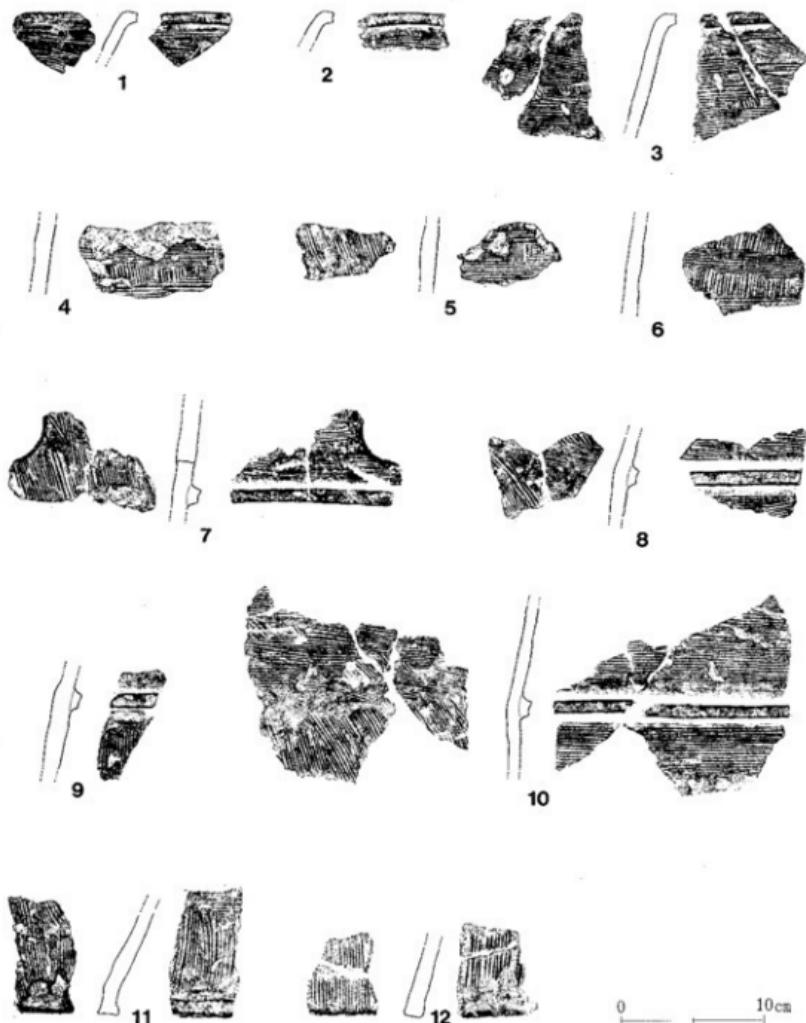


図19. Lトレンチ出土遺物実測図



図20. Lトレンチ土層図及び遺物出土状況図

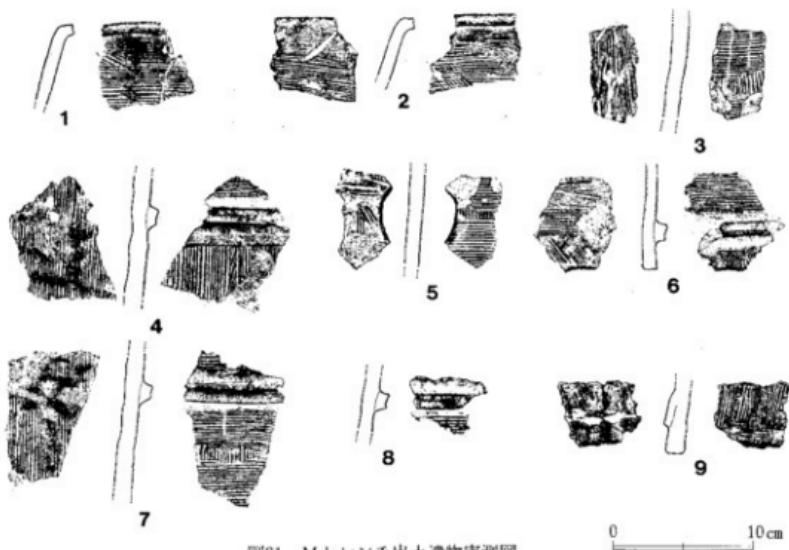


図21. Mトレンチ出土物実測図

(13) Nトレンチ

Nトレンチは5号墳の西側、E軸とF軸の中間を軸に平行に延びる幅1m、長さ9mである。この場所は、古墳西斜面と南斜面の稜線にかかるように設定しており、頂部に向かうにつれて自然崩落の跡が著しかった。

土壙図をみると、E-7とF-7の中間地点より5.5m西の地点に地山を大きく削った部分がみられるが、レベル的にみてもここが墳壠と考えられる。この墳壠から2.5mほど頂部に向かうと、もう一段地山を削った部分があるが、段築部の跡を留めている可能性もある。墳壠より下方に向かっては明瞭な加工痕はなく、なだらかな地形となっている。

遺物は埴輪片が少量と高環の脚部が1個出土している。いずれも墳壠とした部分に分布し、土層的には全て暗褐色土層中に含まれている。

埴輪は少量出土しているが、いずれも小さな破片で調整等を詳しく知り得ないが、観察できるものによると、ここでも2次調整の横ハケを施している。一方、高環は脚部を残すのみであるが、ほぼ完全な脚である。底径11cm、脚高6cmの土師器で、外面はケズリによる調整で、内面のソツ部は工具で回転ケズリを施し、広脚部はハケ調整を施している。この高環に類似のものは、矢頭遺跡B区の住居跡中からも出土しており、両者の関連も考える必要がある。

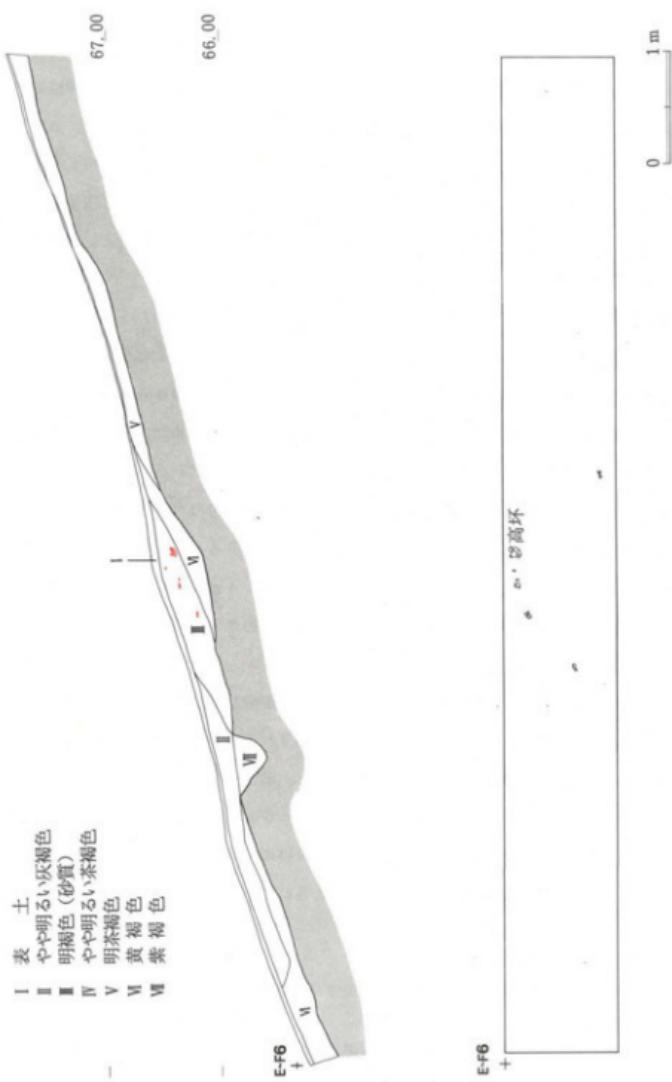


図22. Nトレンチ土層図及び遺物出土状況図

IV ま と め

今回の調査で、水滸古墳群の様相の一端を知り得た。古墳群は30基の古墳より構成されるもので穴道湖南岸域でも最大級の規模をもつ。この古墳群の中でも最大級の水滸5号墳、30号墳が今回の試掘調査の対象となった古墳である。本文中で重ねて述べたように、発見時は5号墳と30号墳を一つの前方後方墳と捉え、前長6.3mの県内でも山代二子塚（松江）に次ぐ古墳として注目を集めめた。しかし、一方では、この見方に疑問を持つ声も多く、遺跡保存の好例という他に、考古学上も関心のある調査であった。

調査は墳丘測量の後、トレンチ調査をおこなうもので、A、B、C、D、J、K、L、M、Nの各トレンチから埴輪片が出土したが、他のトレンチからの出土遺物は全くなかった。そして、Dトレンチからは幅2mほどの溝が発見された。これらにより、調査の途中から後方部としていた墳丘を5号墳、前方部としていた墳丘を30号墳と呼んで調査を進めていった。そして、最終的には、

- ① 5号墳からは埴輪片が出土するが、30号墳からは全く出土しない。
- ② Dトレンチより5号墳と30号墳を区画するような溝が発見された。
- ③ 5号墳の墳裾の標高と30号墳の墳裾の標高に差がありすぎる。

などの理由から5号墳は一辺2.5mの方墳、30mは一辺約1.4mの方墳であろうと考えている。しかし、5号墳、30号墳は互いに意識を持たせた可能性もあり、詳細については将来の調査に待ちたいところである。

さて、5号墳からは多量の埴輪片が出土しており、墳丘築造年代を推定するのに役立った。この埴輪を観察すると、円筒埴輪と朝顔形埴輪の2種が確認されている。ほとんどが細かい埴輪片のため、全様を知り得ないが、確認できるものをみてみると、胴部に縦ハケの後、連続的な横ハケで、工具を器壁上で止めながら施したようにみえるB種横ハケをおこなっている。また外面に黒斑が全く認められることから窯窓焼成と考えられる。底部調整については充分観察できないものの、これらのことより、これらの埴輪は川西編年^{注6}期と考えられ、水滸5号墳の築造年代は5世紀中葉から後葉にかけてのものと推定できよう。

- 注
1. 「穴道町埋蔵文化財調査報告4」穴道町教育委員会 1985年
 2. 「穴道町誌」穴道町 1963年
 3. 「山陰本線玉造温泉、来待間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告」国鉄大坂工事局 1968年
 4. 加藤義成「校注出雲國風土記」 1965年
 5. 「穴道町埋蔵文化財調査報告5.」穴道町教育委員会 1986年
 6. 川西宏幸「内筒ハニワ総論」「考古学雑誌」第64巻2号 1978年

出土遺物観察表

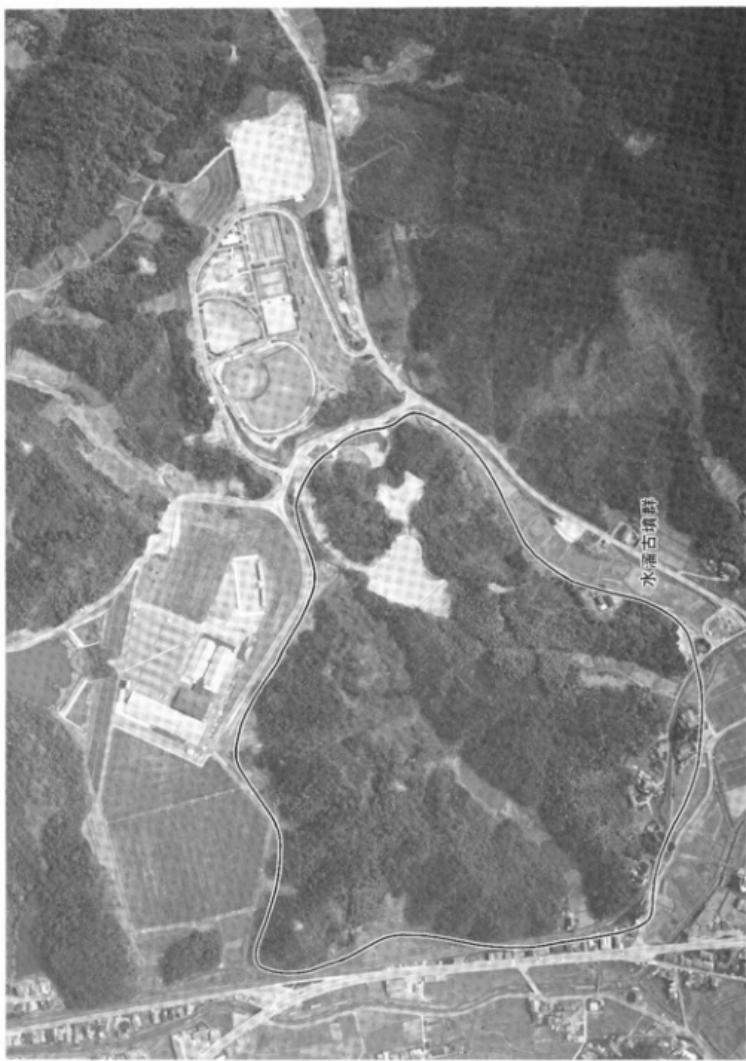
標図番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
6-1	埴輪	口縁部。口唇部は指ナデ調整。外面はやや荒い横ハケ調整。内面はナデ調整か。	明赤褐色	0.5~2mmの石英、長石を含む。	良好	Aトレンド
2		胸部。内面、外面ともしっかりした横ハケ調整。	明赤褐色	1~3mmの石英を含む。	良好	
3		タガ部。タガの上部は横ハケ調整。下部はしっかりしたナメの継ハケ調整。内面はナメの継ハケ調整。	明赤褐色	0.5~2mmの石英、長石を含む。	良好	
4		タガ部。タガの上部は継ハケ調整、下部は横ハケ調整。内面はナメの継ハケ調整。	明白褐色	0.5~1mmの石英、長石を含む。	普通	
5		基底部。底面は平坦で一部ハケ調整。外面は、しっかりした継ハケの後、上部は横ハケ調整。内面はしっかりしたナメの継ハケ調整で端部近くに指頭圧痕がある。	明赤褐色	0.5~2mmの石英、長石を含む。	良好	Bトレンド
8-1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は不明。	白褐色	1~1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
2		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面上部はまばら、下部は密な横ハケ調整。	明赤褐色	1~2mmの石英を含む。	良好	
3		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は不規則な横ハケ調整。	白褐色	1.5~2mmの石英を含む。	普通	
4		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は継ハケ調整。内面上部は横ナデ調整、下部はナメの継ハケ調整。	白褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	普通	
5		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面はていねいな横ナデ調整。横ハケの後、左上がりの横ハケ調整。内面下部には継ハケ調整。	明白褐色	1~1.5mmの砂を含むが密。	良好	
6		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ナデ調整。内面はていねいな横ナデの後、横ハケ調整。	乳白色	1~2mmの石英、長石を含む。	普通	
7		胸部。外面は継ハケ。下部は継ハケの後、横ハケ調整。内面はなめの継ハケ調整。	明赤褐色	1~1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
8		穿孔部。タガを含む全体が横ナデ調整。	乳褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	良好	
9		胸部。外面全体は横ハケ調整。内面は横ハケ調整。	明赤褐色	1~3mmの石英、長石を含む。	良好	
13		タガ部。タガは横ナデ調整。タガ上部は横ハケ調整。内面は継ハケ調整。	白褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	良好	
14		基底部。下端部は横ナデ調整で底面は平ら。外面、内面とも継ハケ調整。	明白褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	普通	
15		基底部。外面は不明瞭な継ハケ調整。内面最下部に指頭圧痕がある。	明赤褐色	0.5~1.5mmの長石を含む。	良好	

標図番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
8-16	埴輪	基底部。下端から外側下部にかけて指ナゲ調整。外面は横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。下部に指頭圧痕がある。	白褐色	0.5～2mmの石英、長石を含む。	良好	
17		基底部。底面はナゲ調整で平ら。外面はナゲ調整。内面と上部に工具の押圧痕がある。	白褐色	2～3mmの石英、長石を含む。	普通	
18		基底部。下端部は横ナゲ調整で底面は平ら。外面はななめの縦ハケの後、縦ハケ調整。内面は不規則な縦ハケ調整。	明白褐色	1～2mmの石英、長石を含む。	良好	
10-1		タガ部。外面タガ部は横ナゲ調整。タガ上部、下部ともしっかりした横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整だがハケメの方向が一定していない。下部には指頭痕が見られる。	明赤褐色	1～1.5mmの石英、長石を含む。	普通	Cトレンチ
2		胸部。外面、内面ともしっかりした縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1.5mmの石英、長石を含む。	普通	
3		タガ部。外面タガ部は横ナゲ調整。タガ上部は横ハケ調整。下部は上部より密なハケメの横ハケ調整。内面は調整不明。	白褐色	2～3mmの石英を含む。	不良	
4		タガ部。外面タガ部は横ナゲ調整。タガ下部は横ハケ調整。内面はややななめの縦ハケ調整。中心より少し下に工具痕らしい横の条痕が見られる。	白褐色	1～2mmの石英、長石を含む。	不良	
5		外面、二段のタガをもつ。胸部は縦ハケ調整の後、横ハケ。内面はななめの縦ハケで、部分的に指頭圧痕が残る。	明赤褐色	1～2mmの石英、長石を含む。	良好	
13-1		口縁部。口唇部は横ナゲ調整。外面はななめの横ハケ調整。内面はハケメの密な横ハケ調整。	明白褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	不良	Dトレンチ
2		口縁部。口唇部は横ナゲ調整。外面、内面とも横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	
3		口縁部。口唇部は横ナゲ調整。外面、内面とも横ハケ調整。	明白褐色	1～2mmの石英、長石を含む。	良好	
4		口縁部。口唇部は横ナゲ調整。上端にヘラ彫きが見られる。外面はななめの横ハケ調整の後、ななめの縦ハケ調整。内面は上部がハケメの密な、ななめの横ハケ調整。下部はななめの縦ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を少量含むが密。	良好	初期形埴輪
5		口縁部。口唇部は横ナゲ調整、外面は縦ハケ調整。内面上面は密な横ハケ調整、下部はハケメのしっかりしたななめの縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	〃
6		口縁部。外面は整った縦ハケ調整。内面は全体にななめの縦ハケ調整だが、上部に横ハケ調整も見られる。	明白褐色	0.5～1.5mmの石英、長石。	良好	〃
7		口縁部。タガは横ナゲ調整。タガ上部、下部とも規則的な縦ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整だが、ハケメが不整形。工具痕らしい条縞も見られる。	乳白色	0.5～1.5mmの石英、長石を少量含む。	良好	〃
8		口縁部。外面は縦ハケ調整だが、部分的に横ナゲ調整、ケズリが見られる。内面はななめの縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1.5mmの石英、長石を含む。	不良	〃
9		タガ部。突出したタガをもつ。外面タガは横ナゲ調整。タガ上部、下部とも規則的な横ハケ調整。内面は横ハケ調整。	乳白色	0.1～0.5mmの石英を含むが密。	普通	
10		タガ部。タガは横ナゲ調整。外面は横ハケ調整。内面は不明。	白褐色	1～2mmの石英、長石を含む。	不良	

番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
13-11	埴輪	タガ部。タガは横ナデ調整。外面はタガ上部、下部とも整った横ハケ調整。内面は不明瞭な、ななめの縦ハケ調整。		1~2mmの石英、長石を含む。	不良	
12		タガ部、タガは丁寧な横ナデ調整。外面はタガ上部、下部とも整った横ハケ調整。内面は不明。		0.5~1mmの長石を含む。	良好	
13		基底部：端部はきらっとした底部調整。外面は縦ハケ調整。内面は縦ハケ調整だがハケメが不整形。	明赤褐色	0.5~1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
15-1		口縁部。口縁部は横ナデ調整。外面は横ハケの後、一部左下がりの横ハケ調整。内面上部は横ハケ調整、下部は左上がりの横ハケ調整。	乳褐色	0.5~1mmの石英を含む。	良好	Jトレンド
2		タガ部。外面はタガを含め横ナデ調整。外面は不明。	白褐色	0.5~3mmの石英、長石を含む。	不良	
3		脚部。外面は不明。内面は不明瞭な、ななめの縦ハケ調整。	白褐色	0.5~1mmの石英、長石を含む。	不良	
17-1		口縁部。口縁部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整、下部は後にななめの横ハケ調整。内面は不明。	明赤褐色	0.5~1mmの石英、長石を含む。	良好	Kトレンド
2		口縁部。口縁部は横ナデ調整。外面はななめの横ハケ調整。内面もななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5~2mmの石英、長石を含む。	良好	
3		脚部。外面は整った横ハケ調整。下端部は後にななめの横ハケ調整。内面は横ハケ調整の後にななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5~2mmの石英、長石を含む。	良好	
4		脚部。外面は整った横ハケ調整。上端部に一部横ハケ調整が見られる。内面はななめの縦ハケ調整だが、上端部と中央部にちがったハケメが見られる。	明白褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	良好	
5		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は整ったななめの縦ハケ調整。	白褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	良好	
6		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は不明瞭な横ハケ調整、内面は不明。	明赤褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	不良	
7		脚部。外面は整った横ハケ調整、中央や上部は後に縦ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。	白褐色	1~3mmの石英、長石を含む。	不良	
8		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面は横ハケ調整だが、上端部以外は全くして不明瞭、内面は縦ハケ調整だが、中央部で1具 framらしい条線も見られる。	白褐色	1~1.5mmの石英、長石を含む。	不良	
9		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面は不明瞭な、ななめの縦ハケ調整。下端に板状工具のトメが見られる。内面は不明瞭だが指印圧痕が見られる。	白褐色	1~2mmの石英、長石を含む。	良好	
19-1		口縁部。口縁部は横ナデ調整。外面、内面ともななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5~1mmの石英、長石を含む。	良好	
2		口縁部。口縁部は横ナデ調整。外面はななめの横ハケ調整。内面はナデ調整の後ななめの横ハケ調整。	明赤褐色	1~1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
3		口縁部。口縁部は丁寧な横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整だが部分的にななめのハケメも見られる。内面はややななめの横ハケ調整。	赤褐色	0.5~1mmの石英、長石を含む。	良好	

掘削番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
19-4	埴輪	頭部。外面は整った横ハケ調整。中央部はその後縦ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整で指頭圧痕もみられる。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	
5		頭部。外面は整った横ハケ調整。その後一部縦ハケ調整。内面はややななめの縦ハケ調整。	明赤褐色	0.5～3mmの石英、長石を含む。	良好	
6		胸部。外面はややななめの縦ハケ調整の後、横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1cmの石英、長石を含む。	良好	
7		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は整ったななめの縦ハケ調整。	白褐色	1～2mmの石英を少量含む。	不良	
8		タガ部。外面は整った横ハケ調整。内面は上部は荒いななめの横ハケ調整、下部は荒い縦ハケ調整。中央はナデ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	
9		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面も縦ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英を含む。	良好	
10		タガ部。タガは丁寧な横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。中央部から上はその後ななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～2mmの石英、長石を含む。	良好	
11		基底部。底面は底面削除で平ら。内面下端にかけ指頭圧痕が見られる。外面上部が横ハケ調整。中央や上から底面にかけては縦ハケ調整だが底面に行くになるとハケメがいややななめである。内面は縦ハケ調整。	白褐色	1～3mmの石英、長石を含む。	良好	
12		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面、内面とも縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
21-1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整で一部にななめのハケメがある。内面は密な横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	Mトレンチ
2		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。その後一部ななめの縦ハケ調整。内面は密な横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
3		胴部。外面は整った横ハケ調整。その後一部縦ハケ調整。工具痕による柔線が見られる。内面は縦ハケ調整。	白褐色	0.5～1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
4		タガ部。タガは横ナデ調整。外面はタガより上は横ハケ調整。タガより下は整った縦ハケ調整。内面は縦ハケ調整で、その後一部ナデ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	
5		円錐部。外面は整った横ハケ調整で、その後中央部は縦ハケ調整。内面は全体的に不明顯だが部分的ににななめのハケ調整、横ハケ調整が見られる。	明赤褐色	0.5～2mmの石英、長石を含む。	良好	
6		円錐部。タガは横ナデ調整。外面タガより上は整った横ハケ調整、下は縦ハケ調整の後一部ななめの縦ハケ調整。内面は横ハケ調整。下部はななめの縦ハケの後ナデ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	
7		タガ部。タガは丁寧な横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整、その後タガより下の一部で縦ハケ調整。内面は縦ハケ調整の後、部分的に指ナデ調整。	白褐色	0.5～1.5mmの石英、長石を含む。	良好	
8		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整後、ナデ調整。	明赤褐色	0.5～1mmの石英、長石を含む。	良好	
9		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面は縦ハケ調整、その後下部は横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整の後指ナデ調整が施され指頭圧痕が見られる。	白褐色	0.5～1.5mmの石英、長石を含む。	良好	

水 潭 古 墓 群 航 空 写 真



図版 2



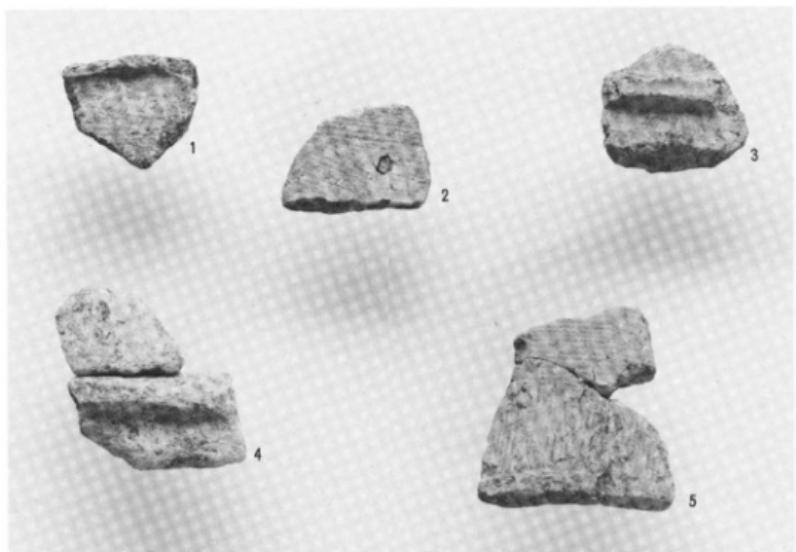
水溜 5号墳（右）30号墳（左）全景（南から）

図版 3



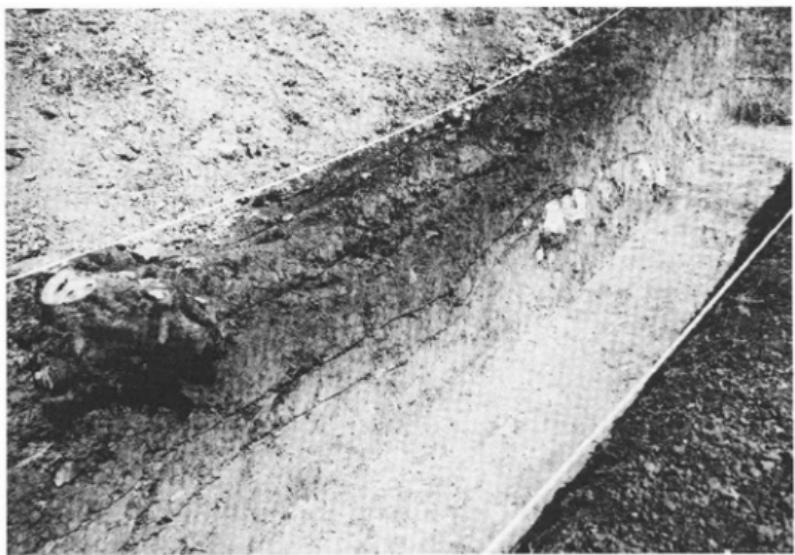
A トレンチ調査状況（東から）

図版 4



A トレンチ出土遺物

図版 5



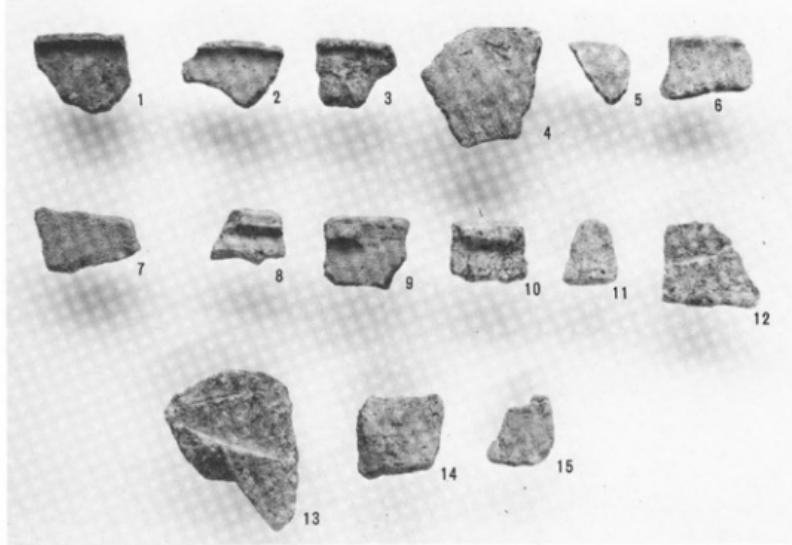
B トレンチ層

図版 6



図版 6
トレンチ遺物出土状況

図版 7



図版 7
トレンチ出土遺物

図版 8



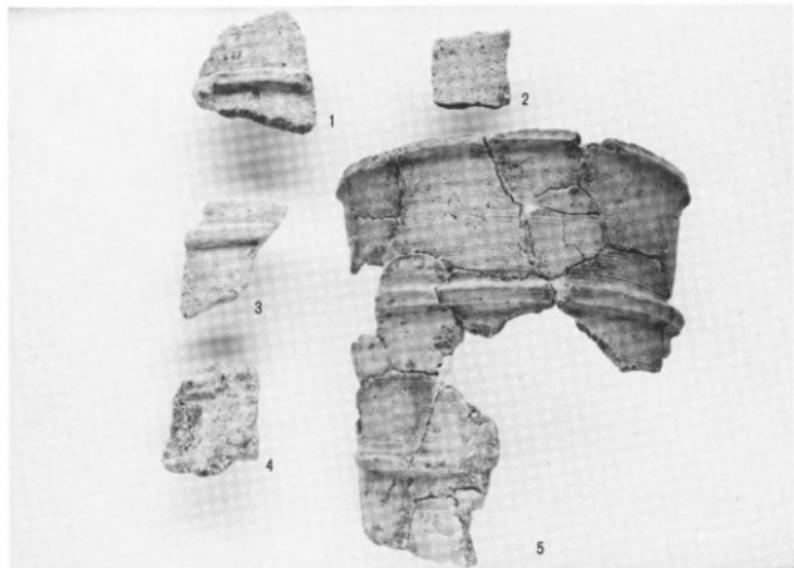
C トレンチ土層

図版 9



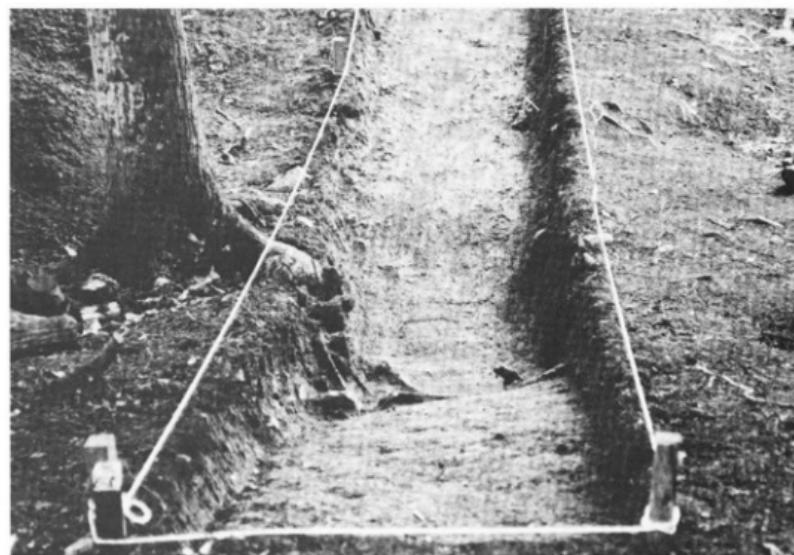
C トレンチ石列（南から）

図版 10



C トレンチ出土遺物

図版 11



D トレンチ溝（西から）

図版 12



□ トレンチ調査状況（東から）

図版 13



□ トレンチ出土遺物

図版 14



E トレンチ調査状況（東から）

図版 15



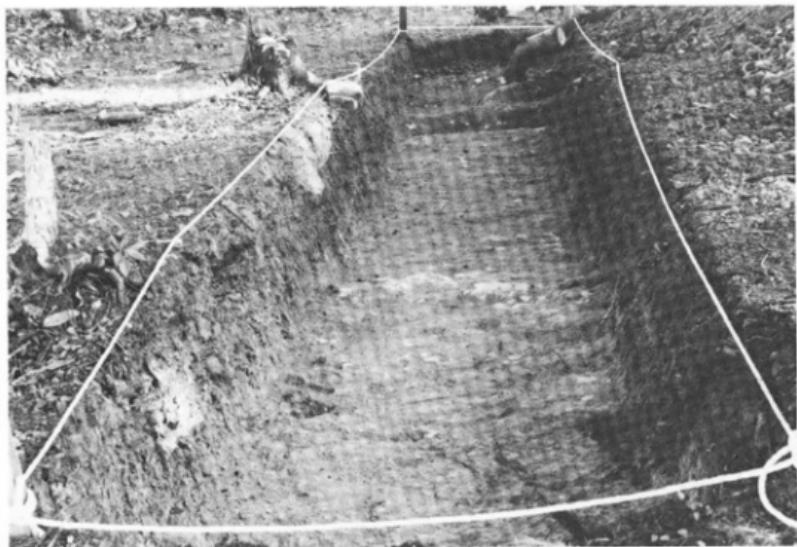
F トレンチ調査状況（南から）

図版 16



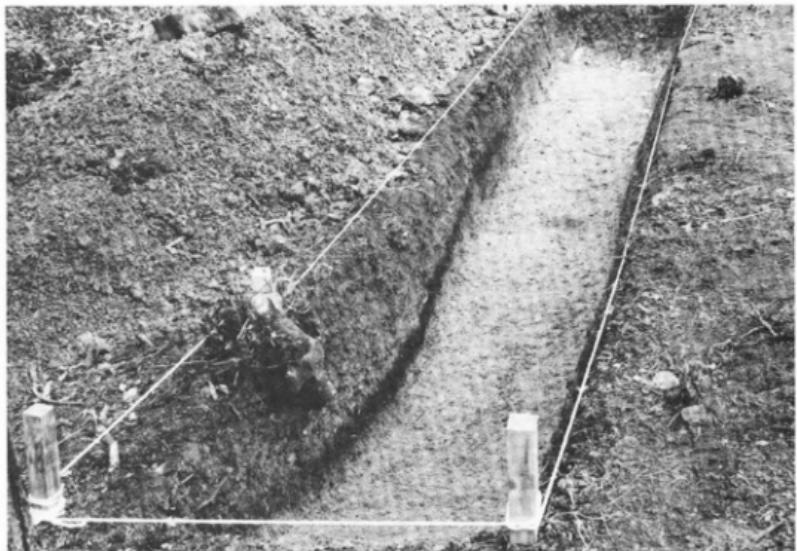
G トレンチ調査状況（北から）

図版 17



I トレンチ調査状況（北から）

図版 18



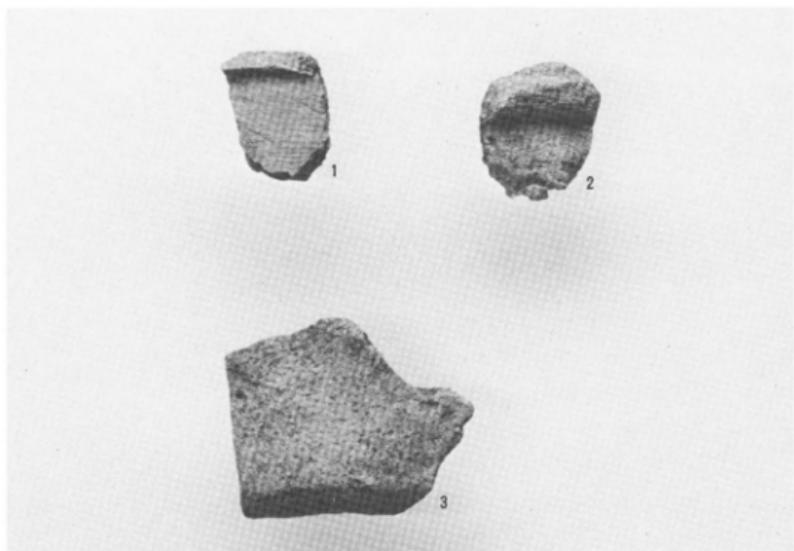
J トレンチ調査状況（北から）

図版 19



J トレンチ 遺物出土状況

図版 20



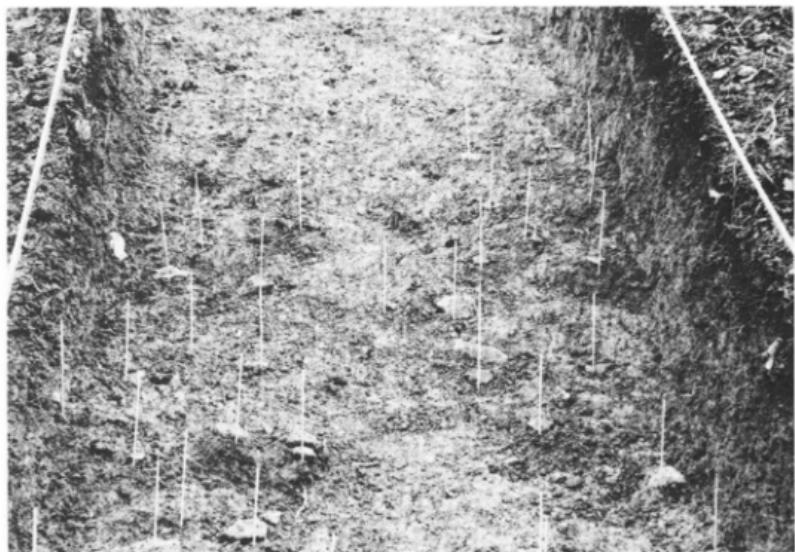
J トレンチ出土遺物

図版 21



K トレンチ調査状況

図版 22



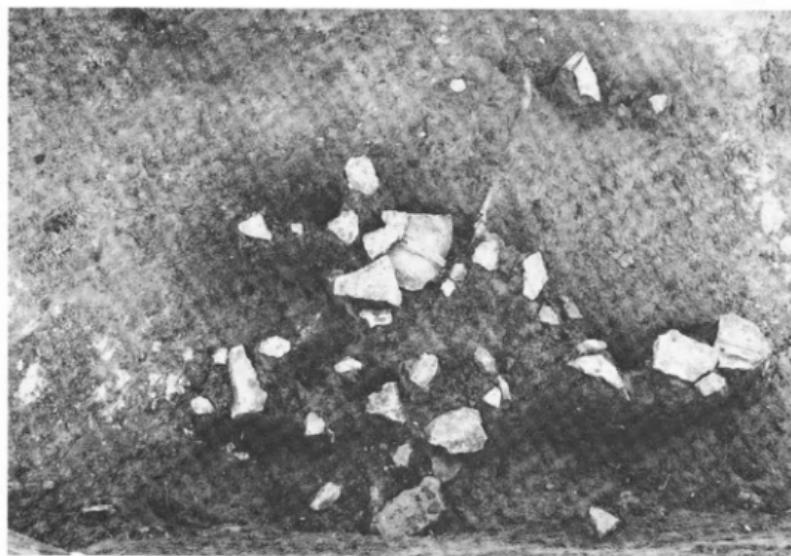
K トレンチ 遺物出土 状況

図版 23



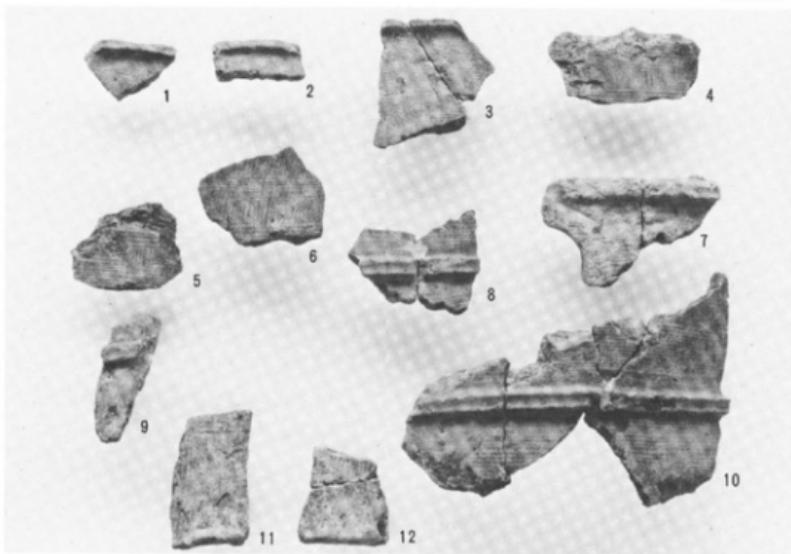
K トレンチ 出土 遺 物

図版 24



L トレンチ遺物出土状況

図版 25



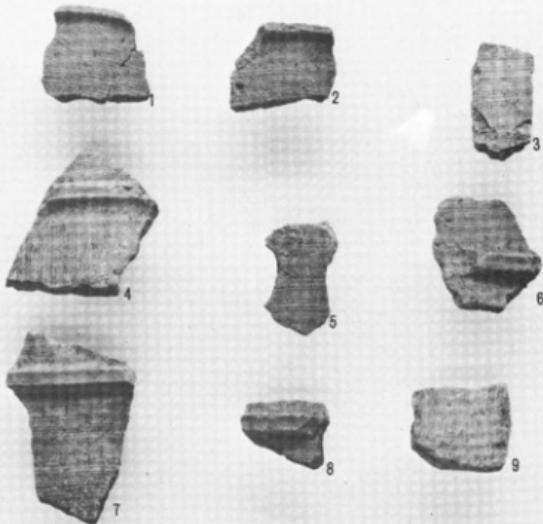
L トレンチ出土遺物

図版 26



M ト レ ン チ 土 層

図版 27



M ト レ ン チ 出 土 遺 物

図版 28

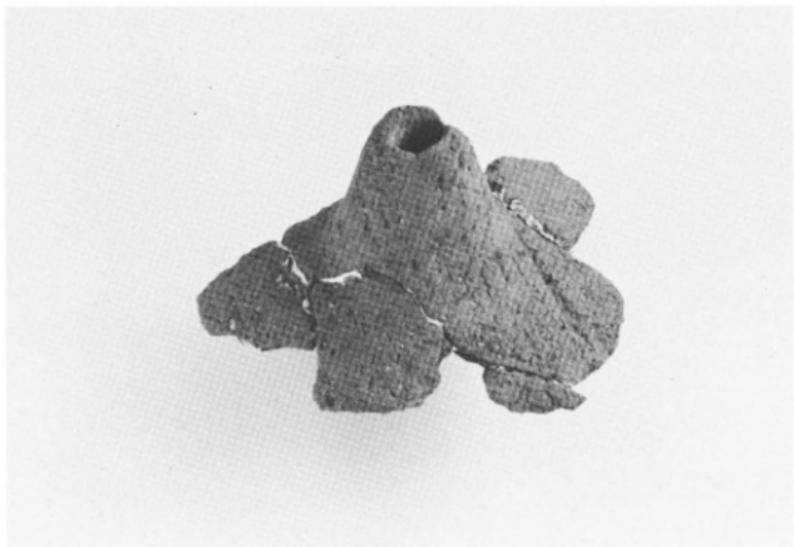


Nトレンチ土層

図版 29



Nトレンチ遺物出土状況



Nトレーナー出土遺物

宍道町埋蔵文化財調査報告 6

昭和63年3月25日印刷

昭和63年3月31日発行

発 行 宍道町教育委員会
八束郡宍道町大字昭和1

印 刷 松栄印刷有限会社
松江市西川津町 667-1